

大分大学大学院工学研究科博士前期課程教育課程編成・実施の方針 (カリキュラム・ポリシー：CP)

大分大学工学研究科博士前期課程では、学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）に基づき、高度な知識と能力を有し、国際的な観点で科学技術の発展に貢献できる専門技術者を育成するための教育を実施する。このために、技術経営、知的財産、外国語での専門知識表現、インターンシップによる企業活動の体験・理解等、あらゆる分野の技術者に共通して求められる能力や資質を養成するための教育を、コース・分野に依存しない共通科目として実施する。また、高度な専門知識とともに、新たな課題の探究・発見・解決ができる人材を育成するために、下記の方針に従って各専攻の専門分野に応じた教育課程を編成し実施する。

機械エネルギーシステム工学コース（工学専門教育プログラム機械エネルギー分野）

<教育課程の編成と教育内容>

本分野では、機械工学とエネルギー工学の両分野に関係する専門知識を学び、総合的な問題解決能力と独創性を持った人材を育成している。

この教育目標を達成するために、カリキュラムには、機械工学に重点を置いた材料力学、熱工学、流体力学、機械力学を中心とする特論講義を、またエネルギー工学に重点を置いた電磁気学、電力工学、電気回路、電気機器学、エネルギー変換工学を中心とする特論講義を設け、幅広い知識修得を可能としている。また、研究や開発能力の養成を重視し、国内外での学会での研究発表を通して、プレゼンテーション能力の向上を目指すことなどもカリキュラムに取り入れている。

<教育方法>

1年次に機械工学に重点を置いた科目とエネルギー工学に重点を置いた科目を開講し、2年次にプレゼンテーション能力の向上を目的としたプロジェクト研究を開講する。さらに全学年を通じて国内外での研究発表の指導を行うことにより、研究や開発能力の養成とプレゼンテーション能力の向上を行う。

<学修成果の評価>

1. 学習成果の評価のもととなるアセスメント評価チェックリストは、教育の改善や改革に対応して見直し、公表する。
2. 授業改善の取り組み、成績評価方法の妥当性については、成績分布の検証を行い改善を行う。
3. 修士論文、修論試問により、研究や開発能力、プレゼンテーション力、報告書作成力を評価する。
4. プロジェクト研究による指導により、国内外の学会での研究発表のためのプレゼンテーション能力の向上を行う。
5. 修了時の「修了予定者アンケート」により、カリキュラム満足度、学習達成度を調べ、教育課程の改善と改革を行う。

学修成果の評価は アセスメント・チェックリストにより実施する。

電気電子工学コース（工学専門教育プログラム電気電子工学分野）

<教育課程の編成と教育内容>

本分野では、電気電子工学全般にわたる広い専門知識を身につけるため、電磁気学、電力、電子回路、機器、通信、物性、電磁波などの幅広い選択講義科目を用意している。また、電気電子工学演習や研究活動において、高度な専門知識を身につけ、課題探求・問題解決能力を養成するとともに、学会発表や修士論文といった実践的な目標に向けた論文執筆やプレゼンテーションの指導を通して論理的説明能力の向上を図っている。

<教育方法>

1. 電気電子工学の専門科目（選択）として、電磁気学特論、電力工学特論、電子回路特論、電気機器工学特論、通信工学特論、半導体デバイス特論、電磁波工学特論などの幅広い科目を実施する。
2. 高度な専門知識を身につけ、課題探求・問題解決能力を養成するために、電気電子工学演習、プロジェクト研究において、学生が主体的に研究活動を行い、学生自身の研究や先行研究に関する内容の内部発表を実施する。
3. 論理的説明能力の向上を目的として、教員による論文執筆やプレゼンテーションの指導、修士論文試問会の開催、学会での外部発表を行う。

<学修成果の評価>

1. 学習成果の評価のもととなるアセスメント評価チェックリストは、教育の改善や改革に対応して見直し、公表する。
2. 授業改善の取り組み、シラバスとカリキュラムの対応、成績評価方法の妥当性については、大学院評価の検証、修了判定、留年・休学・退学の学生数と理由の分析を行い、得られた内容に基づいた改善を行う。
3. 修士論文、修論試問、プロジェクト研究によって修士研究の完成度を調べ、電気電子工学に関する理解、解決能力、論理的に説明できる能力を評価する。
4. 修了時の「修了予定者アンケート」により、カリキュラム満足度、学習達成度を調べ、教育課程の改善と改革を行う。

学修成果の評価は アセスメント・チェックリストにより実施する。

知能情報システム工学コース

(工学専門教育プログラム知能情報システム工学分野)

<教育課程の編成と教育内容>

本分野では複数の教員から2年間にわたりゼミナール形式で研究指導を受ける情報工学演習，システム工学演習を必修科目，準必修科目として設定している。また，情報・知能分野の深く広範な専門知識を得るために，情報数理，計算機システム，知能システム，インターネット，データサイエンス，マルチメディア，コンピュータグラフィックスなどに関連した，多様な選択特論科目を設けている。さらに，課題解決型の選択科目として情報システム特別実習を設け，実務システムの開発プロジェクト体験をとおして実践的技術の獲得をめざしている。これらにより，情報科学の発展に寄与し，社会の高度情報化に貢献できる幅広い能力を有する人材の育成を図っている。

<教育方法>

1年次における演習科目では，既存研究の紹介を通して学術論文における論点の整理の方法や技術的問題に対する議論の正確さを身につける。2年次における演習科目では，修士論文の中間発表等を通じて未知の事柄に対する解決の方法や計画の立て方を身につける。併修する各種特論科目により当該分野に対する広範な視点を身につけ，さらにアクティブ・ラーニングの手法を通じて主体的に議論する力を養う。1，2年次それぞれに選択できる実務システムのプロジェクト体験を通して実践的能力を獲得する。これらを踏まえたうえで実施した研究を報告する修士論文を課すことにより，高度な総合的能力を有する人材を育成する。

<学修成果の評価>

修士論文や修論試問により，研究の新規性，技術的議論の正確さ，当該分野や社会に対する貢献度，論文や発表におけるプレゼンテーション力を評価する。国内外の学会発表や論文発表などの業績リストにより，研究の達成度や貢献度を客観的に評価する。修了時の修了予定者アンケートにより，カリキュラム満足度や学習達成度を調べ，教育課程の改善と改革を行う。

学修成果の評価は アセスメント・チェックリストにより実施する。

(数理科学教育プログラム数理科学分野)

<教育課程の編成と教育内容>

本分野では，数理科学全般にわたる広い知識を身につけるため，代数学，幾何学，解析学，統計科学，応用数学，情報数学などの幅広い選択講義科目を用意している。また，ゼミナールや研究活動を通じて，高度な専門知識を身につけ，課題探求・問題解決能力を涵養し，学会発表や修士論文作成といった実践的な目標に向けた論文執筆やプレゼンテーションの指導を通じて論理的思考力の向上を図っている。

<教育方法>

数理科学分野の専門科目として代数学特論・幾何学特論・解析学特論・関数解析学特論・

応用解析学特論・応用数学特論・統計科学特論・情報数学特論など多岐にわたる科目を開講する。これらの選択講義科目については輪講形式での実施や演習を多く取り入れることで、専門的かつ抽象的な内容の深い理解を促す。論理的思考力の向上を目的として、論文執筆やプレゼンテーションの指導、修士論文発表会、学会での外部発表を行う。

<学修成果の評価>

1. 学習成果の評価のもととなるアセスメント評価チェックリストは、教育の改善や改革に対応して見直し、公表します。
2. 修士論文発表会をもとに、数理科学に関する理解、整理・分析・解決能力、情報収集・分析能力、プレゼンテーション力、報告書作成力を評価します。
3. 修了時の「アンケート」より、カリキュラム満足度、学習達成度を調べ、教育課程の改善と改革を行います。

学修成果の評価は アセスメント・チェックリストにより実施する。

応用化学コース（工学専門教育プログラム応用化学分野）

<教育課程の編成と教育内容>

本分野では技術者・研究者として活躍するための高度な実験技術、日本語および英語で表現された専門的情報を的確に理解し、課題解決に活用できる力を養うため、ゼミナール形式での応用化学特別演習と応用化学特別研究を必修科目として設けている。また、自然科学の基礎知識とともに、化学および応用化学の高度な専門的知識を身につけるための選択特論科目を用意している。さらに、社会人としての基礎力の養成を目的として、修士論文研究課題に取り組み、学会活動などを通してプレゼンテーション力および論理的説明能力の向上を図る。すなわち、自然界、人間社会、産業社会で生じる課題に対して高度な専門的知識および技術を駆使して、解決する能力を身につける。科学技術に関する多様な情報を収集し、論理的かつ柔軟な発想で分析・考察し、グループの中で円滑に研究を進め、それらの過程および得られた結果を適切に表現し、発信する能力を磨くことを図る。

<教育方法>

1. 応用化学特別演習と応用化学特別研究を通じ、専門分野の日本語および英語による文献を収集・読解し、プレゼンテーションと議論により、課題解決に活用できる力とコミュニケーション力を育む。
2. 化学に関する高度な専門的知識を身につけるため、能動的に選んだ専門選択特論科目を学ぶ。
3. さらに、修士論文研究課題や学会活動から、他者と協調しながら主体的に課題を解決するための能力、コミュニケーション能力を育む。

<学修成果の評価>

1. 学習成果の評価のもととなるアセスメント・チェックリストは、教育の改善や改革に対応して見直し、公表する。
2. ディプロマ・ポリシーとカリキュラムの対応、授業改善の取り組み、シラバスとカリキュラムの対応、成績評価方法の妥当性については、教育の改善や改革に対応して成

績分布や授業アンケートにより見直し改善する。

3. 修士論文・修士論文発表会をもとに、応用化学に関する理解、整理・分析・解決能力、情報収集・分析能力、プレゼンテーション力、報告書作成力を、客観的に評価する。
4. 修了時の「修了予定者アンケート」より、カリキュラム満足度、学習達成度などにより教育課程の改善と改革を行う。

学修成果の評価は アセスメント・チェックリストにより実施する。

応用化学コース（自然科学教育プログラム自然科学分野）

<教育課程の編成と教育内容>

本分野では、自然界を支配する基本的な原理や法則の理解をさらに発展させ、未知の領域に取り組む能力を養うための科目、研究を遂行する能力を育てるための演習科目などを含む専門科目を開講する。その上で、地域社会や国際社会が抱える課題解決のために何ができるかを考える研究者としての視点を涵養する。また、修士論文のための研究や論文作成を通して、論理的思考力を養うとともに研究内容を適格に説明できる記述力を鍛え、研究内容に関して、指導教員や仲間とのコミュニケーション能力を高め、国内外の学会等で発表や討論できる語学力や専門能力を養うことを図る。

<教育方法>

1. 1年次に、自然科学に関する専門分野の高度な知識を学ぶため、物理や化学、生物、地学分野の未知の領域に取り組む能力を養うための科目を、自然科学分野科目として実施する。
2. 2年次に、主体的な学びの力を高めるために、アクティブ・ラーニングを取り入れた特別研究や演習科目を実施し、修士論文作成のための研究能力を高め、研究者としての資質を身につけさせる。
3. 研究室での討論を通じて、少人数グループでのアクティブ・ラーニングを取り入れた学修を実施する。これにより自ら問題を発見、解決する能力を育み、他者と協調しながら自らの意見を具体的に表現するためのコミュニケーション能力、さらにプレゼンテーション能力を育み、国内外の学会や研究会に参加する。

<学修成果の評価>

1. 学習成果の評価のもととなるアセスメント評価チェックリストは、教育の改善や改革に対応して見直し、公表する。
2. 修士論文・修論発表会をもとに、自然科学に関する理解、整理・分析・解決能力、情報収集・分析能力、プレゼンテーション力、報告書作成力を評価する。
3. ディプロマ・ポリシーとカリキュラムの対応、授業改善の取り組み、シラバスとカリキュラムの対応、成績評価方法の妥当性については、修了時の「修了予定者アンケート」より、カリキュラム満足度、学習達成度を調べ、教育課程の改善と改革を行う。

学修成果の評価は アセスメント・チェックリストにより実施する。

福祉環境工学建築学コース（工学専門教育プログラム福祉環境工学建築学分野）

<教育課程の編成と教育内容>

本分野では、建築学に関わる高度な専門知識を修得し、さらに関連する多様な分野を包括的にとらえる能力を身につけ、福祉環境における視点も踏まえながら様々な問題の解決ができる人材を育成している。そのために、建築の環境・計画・構造・材料の各分野の特論講義および演習、さらに建築実物模型の建設に係る膨大な施工記録を活用した建築俯瞰特論等の科目を体系的に設けている。また、地域との強い連携を活用した職場実習を行う建築設計インターンシップを設け、高度な専門技術者を養成するための実践力のある人材の育成にも配慮している。

<教育方法>

1. 理工系の知識を幅広く身につけるため、先端工学特別講義、科学技術イノベーション特別講義等の分野横断型の科目を設定する。
2. 福祉環境の視点から建築を捉える力を養うために、福祉建築計画、建築・都市デザイン等の建築環境、計画に関する科目を実施する。
3. 建築学に関わる高度な専門知識の修得のため、建築環境工学、建築設備計画、建築・都市デザイン、都市計画、建築構法、建築構造、建築材料工学、建築生産工学に関する科目を設定する。
4. 主体的な学びの力を高めるために、建築環境、計画、構造、材料に関する設計演習等において、アクティブ・ラーニングを取り入れた学修を実施する。これにより自ら問題を発見、解決する能力を育み、他者と協調しながら自らの意見を具体的に表現するためのコミュニケーション能力、さらにプレゼンテーション能力を育む。
5. 建築俯瞰特論において具体の建築施工プロセスを学ぶとともに、建築設計インターンシップ科目として職場実習を行うことにより、実践力のある人材育成を行う。

<学修成果の評価>

1. 学習成果の評価のもととなるアセスメント評価チェックリストは、教育の改善や改革に対応して見直し、公表する。
2. 修士論文・論文発表会をもとに、建築学に関する理解、整理・分析・解決能力、情報収集・分析能力、プレゼンテーション力、報告書作成力を評価する。
3. 修了時の「修了予定者アンケート」より、カリキュラム満足度、学習達成度を調べ、教育課程の改善と改革を行う。

学修成果の評価は アセスメント・チェックリストにより実施する。

福祉環境工学メカトロニクスコース（工学専門教育プログラム福祉メカトロニクス分野）

<教育課程の編成と教育内容>

本分野では、広い意味での「福祉」に関わる問題を工学的立場からとらえ、それを解決できる資質を持つ人材の育成を目標としている。

そのために、学外での成果発表を目標とするプロジェクト研究を必修科目としてカリキュラムが構成されている。これらの科目の基礎となる知識を学ぶための選択科目には、メカトロニクス（機械工学、電気工学）の各分野の講義に加え人間工学や情報工学の分野など幅広い分野の講義があり、様々な問題に柔軟に対応できる人材の育成を目指している。

<教育方法>

1. メカトロニクスにおける機械工学、電気工学の専門性の高い科目に加え、人間工学、情報工学分野の発展的内容の講義を設定し、講義を通して高度な知識・技術の定着を図る。また、講義ではグループワークやディスカッション等のアクティブ・ラーニングを実践し、問題提起、および問題解決に繋げる応用力を養成する。さらに、先端工学特別講義や科学技術イノベーション特別講義の分野横断・融合型の科目を設定し、多様化する科学技術の発展へ対応できる能力を育む。
2. 学外での成果発表を目標とするプロジェクト研究、および修士論文を通して、主体的に課題を整理・分析し、解決へと導くことのできる力を育む。さらに、研究発表やディスカッションにおいて、研究内容を技術者の視点から論理的に説明し、科学技術、および社会の発展と関連付けながら考察できる力を養成する。

<学修成果の評価>

1. 学習成果の評価のもととなるアセスメント評価チェックリストは、教育の改善や改革に応じ見直し、公表する。
2. 修士論文・修士論文試問会をもとに、専門分野に関する理解、整理・分析・解決能力、情報収集・分析能力、プレゼンテーション力、報告書作成力を評価する。
3. 修了時の「修了予定者アンケート」より、カリキュラム満足度、学習達成度を調べ、教育課程の改善と改革を行う。

学修成果の評価は アセスメント・チェックリストにより実施する。

大分大学 アセスメント・チェックリスト

学部・研究科	工学研究科	学科・専攻・課程	博士前期課程 工学専攻	コース (教育プログラムと分野)	機械エネルギー工学（工学専門教育プログラム機械エネルギー分野） 電気電子工学（工学専門教育プログラム電気電子工学分野） 知能情報システム工学（工学専門教育プログラム知能情報システム工学分野および数理科学教育プログラム数理科学分野） 応用化学（工学専門教育プログラム応用化学分野および自然科学教育プログラム自然科学分野） 福祉環境工学建築学（工学専門教育プログラム福祉環境工学建築学分野） 福祉環境工学メカトロニクス（工学専門教育プログラム福祉メカトロニクス分野）	最終更新日	令和3年（2021年）2月26日
--------	-------	----------	----------------	---------------------	--	-------	------------------

ディプロマ・ポリシー							
1	専門分野における高度な知識・技術を有し、科学技術の進展を見据えながら、自立した技術者として新たな知識・技術を継続的に修得することができる。						
2	専門分野の新たな課題を自ら探求・発見し、問題を俯瞰的かつ多面的に捉えて整理・分析しながら解決することができる。						
3	国際的な観点から科学技術に関する情報を収集・分析し、多様化する科学技術の発展に対応できる能力と技術を自ら学習・獲得することができる。						
4	地球規模で起きている課題を理解し、それらの問題と科学技術との融合に関して技術者の視点から考察し、人類の発展に主体的に寄与することができる。						
5							
6							

番号	実施状況	手法	名称	実施時期	実施頻度	対象	チェック内容・項目	対応 DP						評価者	実施責任者	結果の活用方法
								1	2	3	4	5	6			
1	実施予定	成績評価基準の明確化	大分大学工学研究科 成績評価方針（申合せ）	通年	毎年	全学年	スコアの評価	●	●	●	●			大学院教務委員会	大学院教務委員長	学生の到達度の評価
2	実施予定	評価結果の検証	大学院評価の検証	通年	毎年	全学年	成績分布の検証	●	●	●	●			大学院教務委員会	大学院教務委員長	成績分布の偏りの確認
3	実施中	成績判定資料	留年・休学・退学の学生数と理由の分析	3月	毎年	全学年	留年・休学・退学の学生数とその理由	●	●					コース教員・大学院教務委員	コース長	成績不振者・留年生への指導，学生への学習支援
4	実施中	質問紙	修了予定者アンケート	3月	毎年	2年生	カリキュラム満足度，学習達成度，学生生活の満足度	●	●	●	●			学生	大学院委員会・工学研究科 大学院教務委員会	次年度以降のカリキュラム改善，学生支援への利用
5	実施中	客観試験	修論試問	2月	毎年	2年生	研究完成度	●	●	●	●			コース全教員	コース長	自ら課題を探求し，解決していく能力と物事を論理的に説明できる能力を評価する。その結果を次年度以降の卒業研究指導に活かす。
6	実施中	成績判定資料	修了判定	3月	毎年	2年生	修了しない学生数と理由	●	●	●				コース全教員	コース長	修了しない学生は指導教員を中心にして対応を行う。
7	実施中	民間試験	TOEIC	4月	毎年	全学年	スコアの評価	●		●			国際ビジネスコミュニケーション協会	国際ビジネスコミュニケーション協会	学生の語学レベルの確認と学生への指導に活かす	
8	実施中	論文	修士論文	3年	毎年	2年生	論文の完成度	●	●	●	●			コース教員	コース長	カリキュラムの総合的な妥当性の把握
9	実施中	外部・内部での発表の評価	プロジェクト研究	後期	毎年	2年生	発表会・講演会などでの発表	●	●	●	●			コース教員	コース長	カリキュラムの総合的な妥当性の把握

大分大学大学院工学研究科博士後期課程教育課程編成・実施の方針 (カリキュラム・ポリシー：CP)

<教育課程の編成と教育内容>

教育課程を編成するにあたっては、ディプロマ・ポリシーに示す人材養成の目標を達成できるように、具体的に次の学習・教育到達目標を設定し、それに対応した教育課程を編成し実施する。

1. 「専門科目」, 「特別研究」や「プロジェクト演習」等の履修を通じて、各専攻分野における高度でかつ最先端の専門知識と、研究プロジェクトを企画・立案・遂行できる能力を修得できる。(DP1)
2. 「専門科目」, 「俯瞰力養成セミナー」や「実習科目」等の履修を通じて、専門力, 俯瞰力, 研究能力を強化することにより社会のグローバル化, 高度化, および複雑化に対応できる力を磨き, 社会のイノベーションにつながる新たな分野や理論などの創出に取り組むことができる能力を修得できる。(DP2)
3. 「国際実践演習」や「プロジェクト演習」の履修や学会論文の投稿等を通じて、国際的視野やコミュニケーション能力を修得できるとともに、世界に通用する科学技術の創造に取り組むことができる能力を修得できる。(DP3)
4. 「キャリアパス設計」や「実習科目」等の履修を通じて、研究者・技術者として高い倫理観を持ち、人類福祉に貢献することを自覚し、社会的責任感を修得できる。(DP4)

<教育方法>

1. 専門科目によって高度な専門知識を修得しながら、各種演習及び実習科目によって研究プロジェクトの遂行能力、現代社会における課題の抽出能力や解決能力を育成する。
2. 一般学生、留学生及び社会人学生に区分した、それぞれの適正に応じたカリキュラムとし、一般学生は「プロジェクト演習」, 「国際実践演習」, 「俯瞰力養成セミナー」及び「キャリアパス設計」の4科目、留学生は「プロジェクト演習」, 「俯瞰力養成セミナー」及び「キャリアパス設計」の3科目、社会人学生は「プロジェクト演習」及び「国際実践演習」の2科目をそれぞれ必修科目としている。
3. 演習科目のうち「俯瞰力養成セミナー」及び「キャリアパス設計」の2科目は、高度な教養教育科目として、俯瞰力、高い倫理観や社会的責任感を育成する。

<学修成果の評価>

1. 学習や研究の進捗状況は、演習及び実習結果報告書や研究成果報告書で確認する。
2. 最終的な学習成果は、学位論文予備審査、学位論文本審査並びに公聴会を通じ、学位論文及びプレゼンテーションの内容で評価する。
3. 演習及び実習結果報告書、学位審査結果報告書及び卒業時アンケート等を点検し、カ

リキュラム等の改善を継続的に行う。

学修成果の評価は、アセスメント・チェックリストにより実施する。

大分大学 アセスメント・チェックリスト

学部・研究科	工学研究科	学科・専攻	博士後期課程工学専攻	コース	
--------	-------	-------	------------	-----	--

最終更新日	2020年10月6日
-------	------------

ディプロマ・ポリシー	
1	各専攻分野における高度でかつ最先端の知識を身につけ、独立して研究を展開することができる。
2	社会のイノベーションにつながる新たな分野や理論などの創出に取り組むことができる。
3	国際的視野やコミュニケーション能力をもち、かつ世界に通用する科学技術を創造することができる。
4	高い倫理観を持ち、人類福祉に貢献することができる。
5	
6	

番号	実施状況	手法	名称	実施時期	実施頻度	対象	チェック内容・項目	対応 DP						評価者	実施責任者	結果の活用方法
								1	2	3	4	5	6			
1	実施中	質問紙	卒業時アンケート	10月	毎年	修了予定者	カリキュラム満足度、学生支援満足度、施設・設備の満足度の評価	●	●	●	●			学生	研究指導委員会	アンケートの結果をもとに改善項目の抽出および改善策の検討を行う。
2	実施中	報告書	演習等結果報告書	9月, 3月	毎期	学生	実施内容	●	●	●	●			主・副指導教員	主指導教員	実施内容を確認し、今後の履修および研究指導計画の改善に資する。
3	実施中	報告書	実習結果報告書	9月, 3月	毎期	学生	実施内容	●	●	●	●			主・副指導教員	主指導教員	実施内容を確認し、今後の履修および研究指導計画の改善に資する。
4	実施中	報告書	研究成果報告書	3月	毎年	学生	研究の進捗状況	●	●	●	●			主指導教員	主指導教員	内容を確認し、今後の研究指導計画の改善に資する。
5	実施予定	報告書	演習および実習結果報告書, 研究成果報告書	3月	毎年	学生	教育および研究の進捗状況	●	●	●	●			研究指導委員会	研究科長	内容を確認し、DP, 評価基準やカリキュラム等の検討に資する。
6	実施中	プレゼンテーション, 学位論文草稿	学位論文予備審査	年4期	毎年	学位論文提出者	プレゼンテーション, 質疑応答, 学位論文草稿	●	●	●	●			学位論文審査委員	学位論文審査委員長	学位論文本審査における評価基準に照らして評価し、評価基準を満たすことができるように指導を行う。
7	実施中	プレゼンテーション, 学位論文	学位論文本審査	年4期	毎年	学位論文提出者	プレゼンテーション, 質疑応答, 学位論文	●	●	●	●			学位論文審査委員	学位論文審査委員長	学位論文本審査における評価基準に照らして評価し、今後の指導方法や指導体制の改善に資する。
8	実施中	プレゼンテーション	学位論文公聴会	年4期	毎年	学位論文提出者	プレゼンテーション, 質疑応答	●	●	●	●			学位論文審査委員	学位論文審査委員長	学位論文本審査における評価基準に照らして評価し、今後の指導方法や指導体制の改善に資する。
9	実施中	報告書	学位論文予備審査	年4期	毎年	学位論文提出者	予備審査結果報告書, 学位論文申請書, 学位論文草稿	●	●	●	●			研究指導委員会	研究科長	学位論文本審査における評価基準に照らして評価し、DP, 評価基準やカリキュラム等の検討に資する。
10	実施中	報告書	学位論文本審査	年4期	毎年	学位論文提出者	本審査結果報告書, 学位論文申請書, 学位論文	●	●	●	●			研究指導委員会	研究科長	学位論文本審査における評価基準に照らして評価し、DP, 評価基準やカリキュラム等の検討に資する。